

## フランス国立パリ聾学校との交流およびパリのインクルーシブ教育の現状

原島 恒夫・橋本 時浩・松本 愛・伊藤 詩織

筑波大学附属聴覚特別支援学校と国立パリ聾学校は2003年に姉妹校提携に関する協定書に調印し、2010年からは相互の教職員と生徒による視察・交流を継続して行っている。今回、2016年12月に実施した国立パリ聾学校訪問では、筑波大学附属聴覚特別支援学校教員がオンライン交流（日本とフランスの手話の対比、日本のお菓子についての紹介）と日本文化紹介の授業（水墨画）を行った。さらに国立パリ聾学校の提携校であるロダン中等教育学校、ビュフォン小学校の視察を行い、ロダン中等教育学校ではバカロレア受験を目指す聴覚障害生徒（高校生）の授業、ビュフォン小学校では、主にLPC（Language Parlé Complété：補助サイン付き話し言葉；キュードスピーチに相当）によって進められる聴覚障害児童の授業を見学した。ここでは、国立パリ聾学校において行われた交流の内容と、フランス（特にパリ市内の聾学校、通常教育学校）の聴覚障害教育の現状について報告する。

キー・ワード： 国際交流 国立パリ聾学校 ロダン中等教育学校 ビュフォン小学校 LPC

### 1 はじめに

国立パリ聾学校（INJS : L'Institut National de Jeunes Sourds de Paris）は、1760年ド・レペ神父が創立し、1791年に世界で初めて国立化された200年以上の歴史を持つ聾学校である。現在は社会保健省のもとで公共特別教育機関として位置付けられている。校内に設置する中学校及び職業高校での教育だけでなく、提携する幼稚園、小学校、中学校、高等学校に対する支援を行い、聴覚障害者のための社会貢献・教育センターとしても機能している。

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、筑波大附属聴覚）と国立パリ聾学校（以下、パリ聾学校）は2003年に姉妹校提携に関する協定書に調印し、2010年以降は相互に教職員と生徒の視察・交流を繰り返し行ってきた。

今回、2016年12月に実施したパリ聾学校訪問では、原島（学校長）による筑波大附属聴覚の教育実践を中心とした近況の報告、パリ聾学校内の職業科見学、伊藤（教諭）によるオンライン交流、橋本（主幹教諭）による授業が行われた。双方の学校の教育に関する情報交換をさらに進めた他、学習場面での交流の在り方について、より効果的な方法を探った。



Fig.1 パリ聾学校にて（原島学校長の挨拶）



Fig.2 パリ聾学校にて（高等部主事室）

また、パリ聾学校と提携するロダン中等教育学校及びビュフォン小学校を見学し、フランスのインク



Fig.3 パリ聾学校にて（歓迎会）

ルーシブ教育のシステムや教育方法の概要について一定の知見を得ることができた。

ここでは、2016年12月に行われたパリ聾学校での交流の様子とロダン中等教育学校及びビュフォン小学校で行われているインクルーシブ教育について報告する。

## 2 パリ聾学校の訪問

### （1）職業科の見学

フランスでの職業教育は年6週間以上の職場実習が義務づけられており、パリ聾学校では2年生で6週間、3年生で8週間の職場実習を行っている。訪問時にも多くの生徒が職場実習期間に入っていた。パリ聾学校内には現在9つの職業科が設置されており（Table 1）、生徒の実習及び施設の見学を行った。

園芸科は造園、園芸種苗にコースが分かれており、職業として造園は公園管理や庭師、園芸種苗は販売の職に就くことが多い。校内では年間200万の苗を作り、一部はバザーで販売し、得られた利益は教育や庭の装飾費にあてられている。

2013年の前回訪問時は1つの科だったグラフィック科はグラフィック科と印刷科に分かれた。グラフィック科でデザインされたものは全て印刷科で印刷をする。大型の原版製作機、印刷機等が多数設置されており、外部からの受注にこたえることもできる。学校で製作したメモ帳などの販売を行い、この収益もわずかではあるが教育に役立っている。

鋳前金属加工科、木工科では課題作品を通して基本的な技術を学んでいる。大きな工作機器、多種多



Fig.4 パリ聾学校歯科技工科実習室

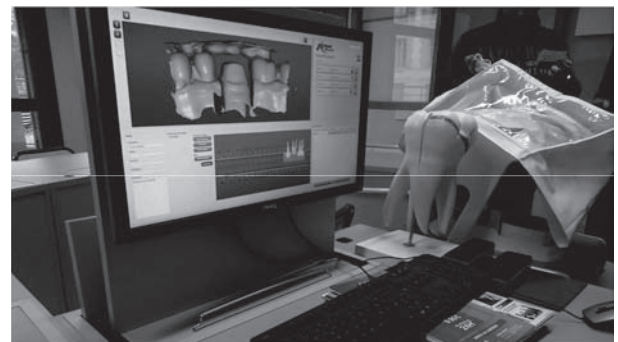


Fig.5 パリ聾学校歯科技工科のCADシステム

様な工具がそろっており、作業中の粉塵を除去するためのバキューム設備や、騒音反響軽減のための設備も充実していて、部屋は衛生面でも整備されている。衛生設備・配管科の仕事は、古い石造りの建物が多いパリでは、重要とされている職業で需要の高い職業である。

歯科技工科は、以前は教員の学校と歯科技工現場での兼務が認められていた。しかし、資格制度が変わり、現在、教員は学校のための勤務となっている。

Table 1 パリ聾学校の職業科

職業科	取得する資格
園芸科	職業適性証(CAPA)
グラフィック科	職業バカロレア(BACPRO)
印刷科	職業バカロレア(BACPRO)
鋳前金属加工科	職業適性証(CAP)
	職業バカロレア(BACPRO)
衛生設備科(配管)	職業適性証(CAP)
木工科	職業適性証(CAP)
歯科技工科	職業バカロレア(BACPRO)
被服科	職業適性証(CAP)
美容科	職業適性証(CAP)

また、障害者支援は企業にとってイメージアップとなるため、企業がパートナーになる事例が多いとの話を伺った。パートナー企業からは、学校が長期休業の際には他の機関に無料で貸し出しを行うという条件で高額な機械をほぼ半額で購入しており、講習会を行う場として教室も提供している。

美容科、被服科は設備見学のみであったが、前回訪問報告と変わらず、美容科ではロレアルの協力を得て充実した教育を行っている様子が伺えた。パリ聾学校の職業科においては、大手企業の協賛を得、最新の機械を用いて現場に即した教育を実現できていることが最大の強みであると感じた。

## (2) 筑波大附属聴覚生徒との交流

### ①交流の参加者・方法

高等部普通科2年生の中から希望者12名(男子4名、女子8名)が参加した。

交流は2016年12月7日日本時間の17:00~18:00、フランス時間の9:00~10:00に学校のタブレット端末と伊藤(教諭)が現地に持参したタブレット端末をインターネットに接続して、それぞれの端末で映像用のFaceTime、文字表示用のiMessageの2つのアプリケーションを使用した。

### ②交流実践

時差の関係で、交流時間が1時間と限られていたため、お互いの自己紹介はせずに交流を始めた。交流の内容は、(a)日本とフランスの手話の対比、(b)日本のお菓子についての紹介の2つである。

日本とフランスの手話の対比については、英文を提示し、英文の内容について日本・フランスそれぞれの手話を用いて表現した。どの手話がどの単語を指しているか理解するのが難しい部分も多々あったため、パリ聾・筑波大附属聴覚教員がフランス語・英語で介入しながら交流を進めた。

日本のお菓子についての紹介では、「伝統的なお菓子」「駄菓子」「ひと手間加えるお菓子」「ポッキーとトッポ」「お土産のお菓子」というジャンルについて取り上げた。筑波大附属聴覚生徒がお菓子について説明した後、パリ聾学校生徒に実際にお菓子



Fig.6 オンライン交流の様子(パリ聾学校)



Fig.7 オンライン交流に参加した生徒(パリ聾学校)

を食べてもらった。パリ聾学校生徒にとって日本のお菓子は魅力的であったようで、生徒たちは「おいしい」「ふしぎな味」など感想を述べながらお菓子を食べていた。

交流時間は1時間と限られていたが、筑波大附属聴覚生徒からは「また交流をしたい」という感想が挙げられた。短い時間であったが、交流を通してパリ聾学校やフランスに興味を持った生徒は多かった。

## (3) パリ聾学校における日本文化紹介の授業

### ①授業実践までの経緯

今回のパリ聾学校訪問に当たっては、今後の相互訪問交流を、「国際教育・交流」の名にふさわしいレベルに引き上げるための取組について検討された。その結果、橋本(主幹)がパリ聾学校において日本の文化に関する授業を行うことになった。

### ②授業のねらい

授業は日本の文化についての理解を深めることをねらいとして行われた。まずは日本とフランスの文化の接点を探ることを考えた。



日本とフランスにおける文化交流の歴史と現状については以下のようにまとめられる。

- ・パリ万博での日本美術の展示を契機に 19 世紀中頃から日本の浮世絵や工芸品がフランスで脚光を浴び、パリを中心に日本趣味の表現様式（ジャポニズム）が流行した。それは印象派の画家たちだけでなく、今日までの西洋美術史に大きな影響を与えている。
- ・現在は日本の漫画がブームとなり、フランス語訳のコミック誌が流通している。また、そこに登場するキャラクターが人気を博している。

フランスには、日本文化を理解し吸収してきた歴史がある。加えて現代においては漫画を介しての文化交流が進行している。この点に着目して、パリ聾学校で実施する授業をイメージした。題材を「水墨画」に設定し、漫画を足がかりにしながら日本文化の伝統の核心に迫り、なおかつそれを体験できるような授業を計画した。

この授業に期待される効果は以下の通りである。

- ・漫画のルーツをたどれば平安・鎌倉時代の作とされる「鳥獣人物戯画」に辿り着くことができる。日本美術史のなかに漫画の起源を発見し、その表現方法の確立に至るまでの歴史的背景と日本の風土を知ること、日本文化についての理解をさらに深めることができる。
- ・伝統的な日本絵画は線による対象の巧みな描写を本質としている。西洋の光と影による対象の立体的な把握の仕方とは異なる日本独特の描画方法を体験することで、日本人のもつ感性や美意識について考えを深めてもらうことが期待できる。

### ③授業について

以下、指導案の形式に倣って概要を記す。

題材：「水墨画（リンゴと西洋梨を描く）」

対象：パリ聾学校中学部 4 年生（日本では中学 3 年生に相当）7 名。他、パリ聾学校教員 3 名。

用具と材料：日本画用彩色筆（中）・水墨画用墨（墨の香）・絵手紙用はがき・水墨画練習用紙・色紙・顔彩セット・消しゴム（落款作成用）

題材設定の理由：②授業のねらいを参照されたい。



Fig.8 「水墨画」の授業風景（パリ聾学校）

授業の流れ：以下順を追って記述する。なお、橋本（主幹）の話はフランス語通訳者によって同時通訳され、それをパリ聾学校の美術の教員が手話で伝える形で進められた。また、1 時間の設定であったためワークショップのような形式をとった。

導入：はじめに日本の漫画のキャラクターについて尋ねた。「ワンピースのルフィ（作画：尾田栄一郎）」、「ドラゴンボールの孫悟空（作画：鳥山明）」との答えがあったため、2 つのキャラクターを水墨画風に描いた絵と「鳥獣人物戯画」の図版を示して本時の制作における線による描写を意識させた。

制作：絵手紙用はがき、ついで水墨画練習用紙、最後に色紙の順でリンゴと西洋梨をモチーフに写生を行わせた。筆遣いについては、橋本（主幹教諭）が実演し「線の強弱やかすれやにじみ」の味わいや良さについて理解を促した。また、「美術資料（秀学社）」を電子黒板に投影し「没骨法」「積墨法」等の技法を紹介した。

一度描いた線は全てが正しいと考えること、バランスの崩れは次に描く線や形の強弱、大きさ、位置などで相対的に修正できること、あるいはアンバランスな構図でも構わないこと、かすれやにじみ等、均一でない線の太さや状態にこそ味わいが潜んでいることを説明した。

最後に消しゴムに名前や頭文字を彫り落款とした。授業の最後には作品を一点ずつ鑑賞しあいその良さについて考えを深めさせた。

### ④まとめ

日本の伝統的な描画技法は西洋のそれとは一線



を画するため、生徒たちに新鮮な驚きと感動をもって受け止められた。また総じて制作意欲が高く、生徒たちの興味・関心の高まりが伝わってきた。水墨画に日本的でなおかつ幽玄な魅力を感じてもらうことを期待したが、完成した作品にはほぼ授業者のねらいが表れていた。

なお、パリ聾学校の美術室には、ルーブル美術館やオルセー美術館、ポンピドー・センターに収蔵されている作品の図版が掲示されていた。また、作品と作品名を自由に入れ替えられるパネル教材もあったが、それを使って知識の定着をはかろうとしていることがわかった。美術室に掲示されている作品について、パリ聾学校教員の解説をいただいた。この教員は美術を専門としていない。しかし、作者と題名、作品によってはその由来までも詳しく理解していた。それらの作品はまさにフランスの宝だが、自国の文化に対する愛着の意識が教育にも浸透していることを感じた。

#### (4) その他

「はちみつの部屋」でコレージュ 1 年生（日本では小学 6 年生に相当）からパリ聾学校で採取した蜂蜜の説明を聞いた。庭の一角に蜂の巣箱が 6 つあり手作りのはちみつを生産している。近隣のリュクサンブール公園でも生産し、コンクールでは常に上位の成績を収めていると伺った。

### 3 ロダン中等教育学校の訪問

#### (1) ロダン中等教育学校について

ロダン中等教育学校はパリ聾学校から徒歩 20 分の距離にある通常教育学校であり、中学生(4 年制) 500 名、高校生(3 年制) 800 名が在籍している。ロダン中等教育学校に通学している聴覚障害生徒はパリ聾学校に所属する教員による教育支援を受けている。聴覚障害生徒は物理等の授業は健聴のクラスで学習しているが、英語の授業は聴覚障害生徒だけの特別クラスの授業に参加している。特別クラスの授業は最大 8 名であるが、学年が上がるにつれて、難易度が上がるため、クラスの人数が減る。

健聴のクラスでは通訳はつかず自力で授業を受け



Fig.9 授業の様子（ロダン中等教育学校）



Fig.10 板書する生徒（ロダン中等教育学校）

なくてはいけない。しかし、授業には支援員が 1 名配置されているため、授業でわからないことがある場合には、支援員に授業内容について確認することができる。

#### (2) 授業の様子について

ロダン中等教育学校では英語の授業を参観した。参観した授業は、聴覚障害生徒 3 名が在籍するクラスであった。3 名のコミュニケーション方法がそれぞれ異なっているため、教員は手話と口話を併用して授業を行っていた。

授業は、“It is possible to live without a cellphone.”というテーマについて、生徒がそれぞれ自分の意見を発表するという内容であった。具体的には、テーマについて賛成か反対かを生徒に尋ね、その理由について、生徒に 40~60 語で自分の意見を英語でまとめるという形式である。生徒が自分の意見を発表した後、発表内容について教員が確認をし、さらに綴りや対義語等の確認をしながら授業を進めていた。

大学進学後、どの科に進むとしても英語は大切に

あるため、英語の授業に対する生徒の意欲は高い。  
また、教員も生徒が英語で質疑応答できることを目標にしながら授業を行っている。

#### 4 ビュフォン小学校の訪問

ビュフォン小学校はパリ聾学校が提携する通常教育の小学校である。1, 2 年生では聴覚障害児だけのクラスで、主に LPC を用いて教育している。

LPC とは、キュードスピーチに相当するものであるが、フランスでは、フランス語独自の方法がありそれを LPC と呼称している。(Fig.11)

ところで、我が国では、キュードスピーチに相当するものとして「キューサイン」が存在するが、アルファベット圏でほぼ共通に使用されているキュードスピーチとは異なる。日本では、独自の子音補助サインが、学校毎に独自に発達してきており、類似しているが統一されていないことと、以下の特徴がある。

- ・あくまでも日本語学習のための聴覚口話法の補助として、必要に応じて部分的に使用する（全ての音につけない）。
- ・キューサインは、手話の獲得に伴って使用しなくなり、音韻を明示する場合には指文字を使用するようになっていく。

LPC について、フランスでは、4 年間の専門教育を受けた LPC 通訳者がおり、手話と並んで聴覚障害者のための情報支援方法としての市民権を得ている。見学した印象としては、フランス語教育に重点を置いている通常教育学校では、LPC を活用するメリットが大きく、それに対し、聾学校ではフランス手話を用いているという状況であった。我が国の聴覚障害教育においても多様なコミュニケーションモードが必要であることはフランスと同様であり、聴覚口話と手話の間にこのようなコミュニケーション補助手段（キューサイン）も、聴覚障害者の実態やニーズに合わせて検討していくことも必要なのかもしれない。

ビュフォン小学校の 3 年生からは健聴児童との統合クラスへ移っていくが、統合クラスでの学習が困

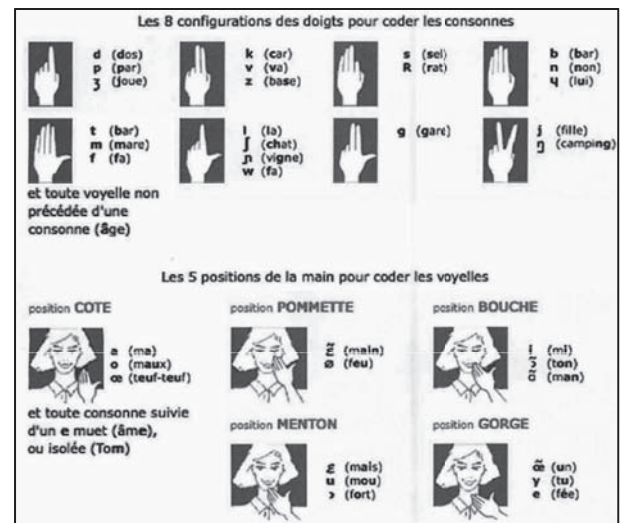


Fig.11 LPC の表

難な場合は引き続き聴覚障害児だけのクラスで学ぶ体制が整えられている。フランス語の授業は、全ての学年で聴覚障害児だけのクラスで行っている。

英語教育は 1 年生から始まり、現在は週に 20 分の英語授業が 2 回あり、単語やゲームに親しんでいる。本格的な英語教育はコレッジ（中学生）から始まる。

##### (1) 1, 2 年生の聴覚障害児クラスの授業

2 年生 2 人, 1 年生 6 人 (本来は 7 人で 1 人欠席) のフランス語の授業を参観した。

教室には正面の黒板上部の壁に LPC の表、窓側には「フランス語アルファベット表」、その他の場所には季節の飾りなどが施されていた。教室後部には PC が配置されており、エデュケーター（サポート専任職員）が空いている時間に作業をしていた。(Fig.12)

授業の構成は大きく分けて 2 つで、1 つ目は「RAFARA」という絵本の読み聞かせを通した「読解」と「発音」であった。(Fig.13) 2 つ目に動物の表現を読みながらの「発音」と「フランス語アルファベットの学習」で、LPC とヴェルボトナルメソッドを組み合わせで行っていた。(Fig.14)

なお、「RAFARA」は「Trimobe」というおそろしい怪物にさらわれた「RAFARA」という名の少女が、「Trimobe」のすむ森から逃げ出して無事に父親

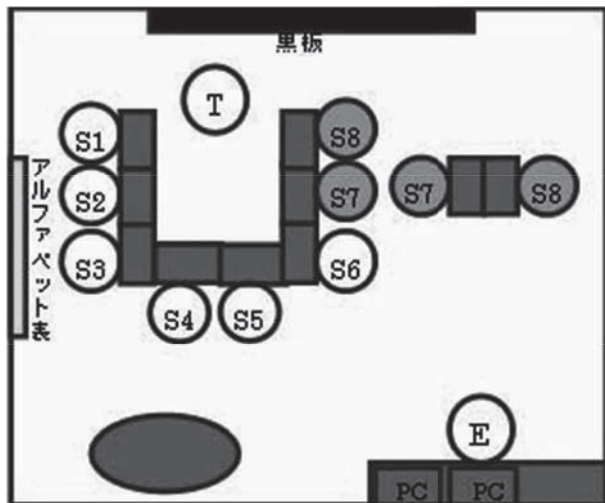


Fig.12 1, 2年生の教室内配置 (略図)

T : teacher E : educator S : student

S1~6 は 1 年生

S7.8 は 2 年生 (授業の途中で席を移動)



Fig.13 題材「RAFARA」(絵本)

のもとに帰るというあらすじのアフリカの童話である。自分が以前に助けたネズミから、「木の棒」「石ころ」「たまご」を与えられ、それを使いながら逃げる場面は、日本の「たべられたやまんば」(作: 松谷みよ子) に似ていた。子どもたちは熱心に聞き入っていた。

授業は通常 55 分だが、今回の授業は 90 分連続で行った。子供たちは教員によく注目し、集中して授業を受けていた。2 学年を同時に見るので、プリント教材は難易度を変えるなど工夫をしているとのことだった。この学校には聴覚障害クラス担当の教員

Sons	mouvement	commentaire
[a]		Bras largement écartés de chaque côté du corps au niveau des épaules
[ε]		Moins écartés, les bras se plient légèrement vers le bas, les diagonales
[e]		L'articulation se tendrait davantage vers le haut « e »
[i]		Fermeture des bras vers le haut, corps en extension mains très tendues Mouvement très tendu vers le haut les mains parallèles devant soi
[o]		Les bras s'arrondissent par rapport à [a] mais ne se ferment pas, les mains ne se touchent pas
[ou]		Les bras s'arrondissent, les mains se touchent
[u]		Les bras pliés parallèles se rapprochent des côtes Les poings sont fermés et poussent vers l'avant et le bas

Fig.14 ヴェルボトナルメソッド

は 2 人で、帰りにもう一方の教員のクラスを通りかかると、3~4 年生くらいの子供たちが数名いて、授業で制作した「折り紙」を見せてくれた。

## (2) 3 年生の統合クラスの授業

統合クラスでは、数学と社会の授業を参観した。26 人の健聴児と 1 人の聴覚障害児童と一緒に授業を受けていた。

授業の内容は他の生徒と変わらず、聴覚障害児童の前にエデュケーターが配置され、LPC を用いて聴覚障害児童に授業の内容を伝えるという形式をとっていた。その際、授業を担当する教員の説明をすべて通訳するのではなく、児童にとって必要な内容を要約しながら伝えていた。また、通訳するだけではなく、聴覚障害児童が授業内容についてわからなくなってしまう場合には、解説をするなど、日本の特別支援教育支援員に近い印象を持った。

参観したクラスには聴覚障害児童の他にも別の障害がある児童が 1 人いた。エデュケーターは、LPC で通訳をしつつ、もう一人の児童に対して授業内容



を説明するなど、その時々状況に合わせて2人の生徒に対応していた。

## 5 成果と課題

今回の交流では、筑波大附属聴覚の生徒が現地に赴き、パリ聾学校生徒と直接交流することはできなかった。しかし、オンライン交流を通してパリ聾学校生徒との交流意欲が高まり、筑波大附属聴覚生徒からは、今後もオンライン交流を継続したいという意見が出されている。一方、円滑なコミュニケーションという意味では、オンラインでの交流に難しさも感じているようだ。そのため、パリ聾学校生徒と交流をする際のコミュニケーション方法について今後も検討していく必要がある。また、コミュニケーション方法だけではなく、双方が理解しやすくなるための交流方法を検討することも重要であると感じた。訪問中にパリ聾学校の生徒が制作したアニメーション作品を鑑賞する機会があった。ド・レペ神父の生涯を扱った作品で、パリ聾学校誕生までの経緯がわかりやすくまとめられていた。双方の生徒が何を考えながら学校生活を送っているのか、映像作品を使った交流方法にも可能性を見いだせるのではないかと考えた。

また、以前パリ聾学校生徒が訪日した際には、茶道や、折り紙（折り鶴をアクセサリーにする内容）の体験活動を行ったことがある。これは筑波大附属聴覚生徒にも好評で、海外を知るためにはじめた学習が日本の生徒の学びにもつながるという効果も得られている。対等な国際交流には自国の伝統・文化についての学習もまた大切になるが、現代の日本においてはそれを普段の生活に求めることが難しくなっている。今後の国際交流事業においては筑波大附属聴覚児童生徒が自国の伝統・文化を学び親しむことができるような活動の形も併せて考えていきたい。

今回は橋本（主幹）によるパリ聾学校生徒への日本文化紹介の授業も行った。授業時のコミュニケーションについては、2人の通訳が介在することから内容の伝達までやや時間を要した。しかし、ポイントを絞りこむことにより十分な成果をあげられる

との確信をもつことができた。実技だけでなく、互いの国の美術作品を鑑賞し合いディスカッションするという授業も考えられる。また、実技系だけでなく、各教科で「国際教育・交流」を行う際の題材や授業の在り方について検討を進める必要があると考えている。

## 6 おわりに

2003年に姉妹校に関する協定書に調印するため当時の齋藤佐和学校長がパリ聾学校を訪問した。それを含め、今回の訪問で7回（日本からフランス5回、フランスから日本2回）の交流を積み重ねてきたことになる。

レクリエーションや自己紹介から始まった生徒の交流だが、これまで様々な形の交流の在り方が模索され、内容も少しずつだが学びの場面での交流に移行するようになっている。今後は互いの考えを知り、それを尊重しながら議論を深めたり、協力して一つのものをつくりあげたりすることができるように導いていきたい。

また、教員間の相互理解も深められ、教育方法について意見交換ができる状況が生まれつつある。効果が期待できる指導方法については互いに学び合い、双方の学校での指導に生かすようにしていきたい。また、パリ聾学校と提携する通常教育学校も紹介していただきながら、フランスの聾教育全般について学ぶ機会も得られている。聴覚障害教育の発展のため、海外の情報を収集することも筑波大附属聴覚の役割の一つであり、パリ聾学校との間では、今後も生徒と教員による学校ぐるみの包括的な交流を進めていきたい。

### 〔参考文献〕

- 齋藤佐和（1994）フランスにおける聴覚障害教育の動向 筑波大学リハビリテーション研究, 3, 77-79.
- 鈴木淳一（2014）フランス国立パリ聾学校との交流 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要第, 37, 76-81.